

令和7年度 第2回丹波市総合教育会議 会議録（要約）

日時：令和8年2月19日（木）午前9時10分～午前10時00分

場所：丹波市役所 山南支所3階 大会議室

出席者

市長	林 時彦
副市長	細見 正敏
教育長	片山 則昭
教育長職務代理者	吉竹 主税
教育委員	上羽 裕樹
教育委員	中川 卯衣
教育委員	渕上 智帆
総務部長	足立 勲
教育部長	山本 浩史
教育部教育総務課長	足立 安司
教育部学校教育課長	小森 真一
教育部社会教育・文化財課長	吉住 健吾
教育部恐竜課長	松枝 満
教育部こども育成課長	西山 健吾
教育部教育総務課副課長兼企画総務係長	足立 真澄
教育部学校教育課教職員係長	足立 沙織
総務部次長兼総務課長	荒木 一
総務部総務課副課長兼総務係長	船越 正一
総務部総務課主事	山口 智也

傍聴者 0名

- 1 開会
足立部長
- 2 市長挨拶
林市長 挨拶

3 協議事項

(1) 「学校における働き方改革の一層の推進」

(ア) 概要説明

教育部 学校教育課 小森課長

(イ) 意見交換

○林市長

- ・超過勤務をなくそうとしても中々なくなるのはわかる。先生の煩雑なことを助けるスクールサポートスタッフを学校に配置したが、45時間80時間という残業があり、もう少し何とかならないかと思っている。
- ・超過勤務を減らすにはどんなことをこれからしていけばいいか、部活動の地域移行も含め、こちらでできることはしていきたいし、お互いに考え、問題を煽り出して考えていきたい。
- ・教育委員会、行政でできることできないことがあると思うが、問題点を見つけ、行政でできることは頑張っけてやっていきたいと思う。「楽しい学校をつくろう。休まない学校をつくろう。」そういうことを一番思っている。

○中川委員

- ・行政ができること、教育委員会ができることがどんどん変わってきている。
- ・先生たちも変えられるところはどんどん変えていこうというような動きはあるのか。子ども達が帰った後の超勤時間でしかできないこともあると思うが、減らせるものを減らすといった努力をしておられるのかといったことを教育委員会として把握していく必要がある。

○小森課長

- ・職員会議や事務処理で学校の中でできる努力もあるので、例えばペーパーレスにしてできるだけ職員の手元の準備時間を減らしたり、職員会議の時間を制限したりスリム化できるものはされていると思っている。ただし、突発的な生徒指導事案など、必ず学校で時間をかけ、打ち合わせをして、保護者との面談や家庭訪問をする場合もあり、それが減らせないものとして残っている。また、時間がかかっていた作業は、単純化したり、ICTを使ったり、見直しがされている。

○ 瀧上委員

- ・ 全体的に勤務時間が改革されて全体的には先生方が働きやすくなっているのかなと思う。ただ、帰らないといけないので家に仕事を持ち帰っておられる先生方もいらっしゃる、学校で完全に仕事をして、家では仕事はしないとった方もおられる。実際、先生方はどのように思われているのか。
- ・ 教頭の勤務時間が長い気がしている。

○ 小森課長

- ・ 圧倒的に教頭の超過勤務が多い。教頭職というのは、どうしても朝が早く帰るのも遅いのが実態である。先生のライフスタイルも多様となっており、それに伴って働き方も多様となっている。ただし、できるだけ持ち帰り仕事は減らすべきだとは思っている。ただ教材研究については、本来の業務であり、時間をかけてやりたいというところは、どこまでが業務かというグレーゾーンがある。

○ 上羽委員

- ・ 働き方については、大変進んでいると思う。資料だけでは実態として、マイナスの部分が大きく出ているが、自分で研究されて、自分のスキルのためにやっておられる方もおられると思うので、数字が減っていくことだけが果たしていいことなのかという所も見ていかないと、数字は減ったが質も下がったり、レベルアップする機会を損失することにもなりかねない。大変難しい問題だと思うが数字だけおえばいい話ではないのではないかなと思う。

○ 吉竹教育長職務代理者

- ・ 働き方改革については難しいと感じている。課題がたくさんあるとも思っている。
- ・ 先生の役割、働き方、学校での振る舞い方が、子どもたちにとってプラスになり、将来にわたって教師の役割というのはどういうことが大事なのか考えさせられた。学校は面白い、先生に会いたいということを目指していくために先生のゆとりや子どもたちのために接していく時間を確保していくということが、この働き方改革の目的になる。そのことを忘れてしまうと数字や手段ばかりを追い求めることで終わってしまう。それは本来の目的を達したわけではなく、1つの手段を達成したのであって、本当に子どもたちにプラスになったかというところを考えることが

質の高い取組となるのではないかと思う。

- ・地域の理解というものが不可欠になってくるので、様々な取組をする中で先生方や学校の実態、課題となっていることを地域や保護者にも伝え、理解を得ることが大切になってくる。
- ・改善が図られると子どもたちと接する時間が増え、ゆとりが増えて、ひいては子どもたちのよりよい成長に繋がっていくということを丹波市の教育のこれからの方針や柱にして進めていけばいいのではないかと思う。

○片山教育長

- ・本当に教育にとって大事なことは何なのかということが抜けてしまうと学校が崩壊することに繋がりがねないので質を下げないことが一番大切かと思っている。
- ・現場の先生方が本当にどのように思っているのかを掴んでいないと、とにかく早く帰るために時間を縮めて子どもとのかかわりをやめていくといった問題ではないような気がしている。そのことを見失わないように、どういうサポートが必要かということを考えていき、先生の質を下げないことが大切である。

○山本部長

- ・働き方改革をずっと言われ続けて、教職員が嫌になっていないかということも大変気にしている。教職員に聞いてみると、本来教師がすべきことで勤務するのは、それほど苦ではなくて、授業の準備や子どもの悩みに寄り添うといったことは働きがいとして大事にしたいと思っている。そうではなくて、やらなくてもいいのではないかと思うことがあることが苦であるようである。
- ・行政としては学校への仕事は減らしてきているが、どうしても提出しなければならない調査や実態をとらえて施策を打っていかなければならない調査もあり、同じ調査が大規模な学校にも小規模の学校にも同じだけある。学校が年々小規模化する中で、先生の数も減っており、1人の先生が抱える調査の数が多くなる場合がある。そういったことから、調査が多いというイメージを小規模の学校は持つてしまうことになる部分もある。

また、カリキュラムオーバーロードといわれる社会的要請によって学校にやって欲しいと言われるものが沢山ある。いわゆる国語、算数、理科、社会といったものは時間割の中で教育課程があるが、それ以外の主

権者教育や消費者教育、男女共生教育などといったものが増えてきています。それは大事なことだというのは学校がわかっているのですが、中々、取捨選択ができないという部分があって、そのあたりは次の学習指導要領で若干見直しがされるのではないかと考えている。

- ・教頭の超過勤務が多いのは、中学校はそれほどでもない。最後に戸締りする職員が別にいるので教頭も早く帰れるが、小学校はそういう文化が昔からない。教頭が、鍵を開けて最後閉めるという文化が中々払拭できない。教頭になったらそれをしないといけないと教頭自身も思っているところがあって、その意識改革は必要であると思っている。今後、次の手を考えていかなければならないと思っている。

(2) 「令和8年度丹波市の教育（実施計画）重点施策」

(ア) 概要説明

教育部 山本部長

(イ) 意見交換

○細見副市長

- ・部活動の地域展開については、心配していたが16団体の応募があったという報告であった。やらないといけないのでとにかくできるところをお願いするという話ではなくて、子どもと接するだけの力があるかどうかを見極めていかないといけない。また、そこまでどうやって通うのかといった話が今後の課題となってくるので考えなければならない。
- ・時間外勤務の資料は、学校の分だけであるが、教育委員会事務局の超過勤務状況はどうなっているのかと思う。教育委員会事務局が多くの残業をすることは、各学校の残業に必ずはね返るのではないかと考えている。

○林市長

- ・私が小学生の頃、初めて学校の図書館に入ったときに大変感激して毎日通った。それが今でいう居場所だったのかもしれない。そういう図書館を今年は9校も作るということであったが、精一杯こちらも協力していきたい。

4 その他 なし

5 閉会

足立部長